

伊 井 保 範

さん、私しの家へ火を放けた伊井保範さんです。新是れ
の怪しからん何で僕が伊井保範と申しませうか。全く佐野新
次郎と申す者です。万お途惚けあさいます。ナ探偵の玉野利吉
君を沼津からして日金山へお連れ込みあつて拳銃で打つた
覚えがございませう。私しの家で料理人の喜助を殺し其外大金
のものを盗みあすつたが天命へものゝ恐ろしいもので次
家の刀の袋を置てお出であすつたんで直ぐ足がつきました。此
の時、佐野新次郎の携さへて来た小やか靴を今までの隠し
てをりました。が突然、靴の中から拳銃を取り出だして、伊如
何よも其方の言ふ通り僕に伊井保範だ此の家へ飛び込んで大
金を取やうとした。妨害をしやアがつた。ト言ひあがら一
拳銃を万助かたへ打ち掛けました。主人が逃げ出すところを
又一發打ち掛けました。が別々當りません。其のうち、帳場の邊

伊 井 保 範

りへ來まして出てぬた百五十圓を掴み出し其のまんま戶外へ
出やうとするところを出入の消防夫の勘さんといふお方が
勘此の盗つ人動きやアがるか。ト脊中を打ちのめしました此
の保範の又た勘さん一發拳銃を向けて打ちましたが運悪く
勘さん右りの腕を打ちぬかれました然れど別段一命は別條
にございません保範の帽子を置いて靴も穿かんで逃げてしま
ひました其の内は警察官吏も浮出張もあり夫れくお手配り
も相成りしましたがトウく保範の行方といふもの分らなく
あつてしまひましたッコデ万助の野村の主人は頼んでお才を
呼んで懇々説諭をして貰ひましたところがお才も置きまして
何日の出樓の万助に向つての才面目次第もございません何
卒勘辨して下さいましたト幾重も詫言ひまして宗三郎の不實を
怨み罵しり切齒をして口惜しがりましたが万助が是れを怨さ

伊 井 保 範

めて万彼様いふ不實なもの欺されたのがお前の因果だか
ら斷念で元木もまざる裏木さしといふから己れと一諸も静岡
へでも名古屋へでも行きささるが宜い。ト斯う言つて福井の家
へ泊めて置きまするうち誰人から聞きましたかお節宗三郎の
燕海の樋口もぬるといふ噂までございましてたゆま 才其様お
ら樋口まで是非行かねばならぬと涙だましてくれて一本の遺書
をしてお才の若たまんま横濱を出てまして只だ慕のしいの宗
三郎憎らしいのアノお節と昔の班女の子ゆゑの暗、我れの戀
ゆゑ心の暗迷ひ染めたる戀ごろも脱くこと難き東海道身の程
が谷も打ち忘れ戸塚の走る女の足、富士もよせたる藤澤や大船
を跡として彼の平塚を夢と送り大磯小磯岸打つ浪、虎がへしの
其の昔しの彼の十郎祐成どの墓ひく／＼て尼とあり心の石もあ
りしといふ夫れも優る我が思ひ此處の國府津か小田原や進

伊 井 保 範

ひ足もと波高く登るも妻さ石橋山昔し源家の頼朝が墟と隠れ
し大杉の何れもあるか白真弓その弓取りの眞田與市股野のた
めは打たれし此處か彼處か浦千鳥それの主君をば思ひした
め是の情夫を慕ふある敢果あき狂女のお才が身我れから招ぐ
煩悩の夢のこどくよ來りまする米嚙の此方此れより江の浦へ
と足を運ばせるところへ駕籠人足が兩人お才の姿を見て
夫、お才姉さん少し待たねへかお内儀さん見りやア縮緬づく
めで何だか立派だけれと餘ッばと訝しいぢやアねへか何うか
してゐるんだナ。斯う言われまするト 才、モシ根府川の浮番所
てへあア何處ですへ 夫、其りやア昔し根府川の浮番所のあつ
たけれども此頃ア浮番所も何も有りやアしねへ 才、妾しの行
く先きの何處でせう 夫、笑談言つちやア可ねへお前の行く先
を己れつちが知るものか 才、熱海といふところの何處かんで

伊 井 保 範

す 夫、其りやア熱海ア知れてらア此の駕籠へ乗りやア連れて
つてやる 才、お節と宗三郎の何んか妾をしてゐます。斯う言つ
てるかと思ふと頻り泣き出した 夫、姉さん何で泣くんだへ
才、旦那さま相濟ません妾くしが悪いことを致しましたので
ございます何卒御勘辨を願ひますア困つたことで生きてぬ
る甲斐がございません南無阿彌陀佛、只今死なます冥土へ行き
ます。斯う言われたんで駕籠人足兩人の吃驚りして 甲、棒組、薄
つ氣味ア悪いから行かうぢやアねへかグツツするてへど此
の女は喰ひ殺される 乙、アレ見やア彼の女ア飛アがつた踊つ
てるく。其のうちお才の我れを忘れ頻り又歌をば謡つて
をりまする 才、忍ぶ戀路の扱て果敢あさよツンく 踊り
始めました然うかと思ふと泣き喚く二三町駆けて参りました
自分の腰帶を取つてチロリと見あげると傍ならは大きな松が

伊 井 保 範

ございまして其のあか柳がございまして其の柳の樹をゲマ
く笑つて夫れへ腰帶をかけたして始め其の腰帶へ腹を押つ
けて忍籠人足の方を見てお出でくをしてをります忍籠人足
の薄つ氣味悪るくキヨロく見てゐるとお才が終ゝ身体をク
ルく巻いて一番終に才旦那さま堪忍してお呉んあさい。ト
いふと自分の腰帶で自分の首を二ツ三ツ巻いて二十八を一
期として柳の樹へメラリとブラ下つて死んでしまひました忍籠
人足兩人の吃驚りして腰を抜かして動くことが出来ません遂
又此の事をバ小田原の警察へ知らせましてございませうが實
惡の報いといふものゝ恐ろしいものでございませうお才が此處
又哀れな最期を遂げましたのゝ亭主の罰でございませう扱て
是れからのお話し次回といたします。

第 十 四 席

伊 井 保 範

エー此方ハ伊井保範でございませうが横濱でもって彼の万助
遇つたハめゝ恐ろしいことも出来ず故郷へ立歸つて参りまし
た彼れが故郷ハ駿州富士郡でございませう當時ハ静岡兩替町
た紺屋町浮月樓傍らハ一寸とした家を構へ金貸あを致して
世の中を瞞着致してをります女房ハ名古屋から連れて参つた
お町で是れを名を改ためましてお春己れの名を佐野新次郎
あぞハ全でございません夫れでお銀も地蔵村から連れて参り
まして藝妓を致さしてをります是れを小万と申します外ハ小
鐵又お清、小新、小勝といふ藝妓を抱へてをります此れハお春
が切つて廻してをりますから随分繁昌いたして茶屋の方ハ
附届けも宜く致してをりますから角池でございませうか福住
でございませうか魚磯まだ其外ハ三盛樓、池川、延壽亭、河忠を始
めといたしまして可成りお料理店ハ皆お顔を出しまする夫

伊 井 保 範

れがため、實入りも随分宜うございますから井伊保範の佐野
新次郎の遊んで藝妓屋の親方さんでそれバ宜いのでございま
す夫れ又悪性の悪事の何うしても止まないので、既、横濱から
歸らんうちも此の静岡ばかりで三十八ヶ所も強盗をしたと
いふので其のほか愛知縣神奈川縣へ参りますれ、餘ほどの悪
事を致したのでございます然るがゆゑ、探偵家の日々、伊井
保範の舉動を探つてをりまするけれど、何うも相分りません、實
は目の先ををるのでございます、爰、七軒町の探偵松島兼太
郎といふ人折々魚磯といふ家へ來て遊んでをります、今日も魚
磯の座敷で一寸と一杯飲んで歸らふとすると隣り、何やら男
女の話し聲が聞にます、何かと思つて覗いて見ると、今年十
八のお清といふ藝妓が仇ッばい衣服をいたしまして、少しハト
ベトしてをります、がお酒の徳利を取つて酌をしてをる酌をさ

伊 井 保 範

れてをる男を見るてへと佐野屋の亭主でござります、松ヤア
佐野新の亭主と抱えのお清と飲んでるところを見ると、此奴ア
必定山の神を出しぬいて此の女を手付けやうと斯ういふんだ。
斯う思ひましたから面白半分、松島の兼さんが袂の傍で黙止
つて虫を殺して聞いてをります、と佐野新次郎の辞、お清
お前、此のころ魚の店の方の旅店、居る赤坂さんて、へ人が大
變、又惚れて居るさうだ、赤坂さん、若し男振、宜し一寸と金が
あると來てぬるから、赤坂であけりやア可、まいよ、清、旦那さん
否や、です、ね、赤坂さん、その事ばかり言つて、妾し、赤坂の事、あ
ん、さア聞くのも否や、です、よ、妾し、惚れてる人があるんです、が
此方ばかり思つても先方、で、何とも思つて、呉れ、あ、い、んです、
から、詮方がありません、よ、新、オヤ、己惚氣で、恐れ、入る、ね、エ
實、又、驚ろ、き、入つた、も、んだ、誰、れ、だ、へ、お、前、が、惚、れ、て、る、て、へ、赤、ア、お

伊 井 保 範

清が流し目新次郎を見て 新誰れでも宜いんです。ト言ひあ
がら 爪つた。新次郎の 新アイタ、止してお呉れよ人が違ふ
んだ 清違ふもんですか 妾しも東京を喰ひつめて此の静岡へ
来て 貴君ん處の 浮厄介もあつてゐるんです 未だ十八かソコラ
で 東京を喰ひつめてへのも 餘まり甚いやうですが 十四の時
から 浮氣を始めて 純帳俳優を皆買って アラ宜ございの 半玉か
ら 一本の 藝妓にあつても 二重三重の 借金で首が廻らぬやう
も あつちまつて 夫れで 貴君ん處の 姉さん頼んで来たんです
静岡へ 来ちやア 浮君をすること何れも 出来やアしません思ふ
男も 何も ありやアしません 夫れで 親方さんの やうにお方が 妾
を 可愛がつて 下さりやア 何んか 苦勞もして 見たいんです 併し
姉さんが あんさる から 迎も 妾しあんざア 駄目あこととと
いませうねエ 新馬鹿を言ひねエ お前が 然う言つて 呉れりや

伊 井 保 範

ア 何んか 事をして お前も 遇ふよ 事によつたら 愛の家も ぬる
化めそて へおア 訝しいが お春の 女ア 敵さ 出して お前へ 家へ
入れて やるよ 清然う ですか 眞實も 眞實から 妾しア 一命も 入
ら さいく らぬです よ 新然う お前も 言ひれちやア 堪らぬいオ
時よ お前も 指輪一ツ 遣らふ 清ア 眞實ですか 新此りやア
女房も 知られぬエ やうよし 弟ハア 有りがたう。ト 言ひあが
ら お清が 手も 指輪を取つて 見ると ダイヤモンドが 二ツまで 這
入つて てる 何う 評價でも 三百圓以上の 品物 清マア 旦那此ん
さ 宜いものを 妾しよ 下さつて…… 新可愛い お前だもの 遣
ら かくつて 何うするものか 清ソシテ 此りやア 何處でお求め
さすつたの 新ナア 此りやア 横濱も ぬる時 或る人よ 貰つた
んだ 清然う ですか マア 大層さ 指輪です ねエ 新マア 宜いや
狂て 起つて 見ろく 斯う 言はれました から お清の 指輪を

百九十六
徹めて 清何うです光るでせう。斯う起つとこア奇麗でせう似
合ひましたらう 新イヤ似合つたところぢやアねエ美しい女だ
あア玄宗皇帝が見たらお前を何と賞めるだらふ此奴ア李伯で
も呼バあけりやア追付かあくあつた。是れを聞いて松島兼太郎
が文字のある人ゆゑ思はず聲を放つて

一枝濃艶露凝香

雲雨巫山枉斷腸
可憐飛燕倚新粧

流石の伊井保範も吃驚して 伊何だ彼れん……お清もベチヤ
リと坐つて 清何處かの書生が兩人の容子を見てぬたんです
よ 伊訝う洒落やがらア 清今の詩の彼れ何ですへ 伊ア
リヤア只今己れが玄宗皇帝とあつてお前を楊貴妃と譬へたも
んだから李白の雲雨巫山の詩をやりやアがツたんだ 清雲雨
巫山へあア何のこつてすよ 伊其りやア説明する限りにあ

らずだ。此の時女中が 女ヲヨイと姉さんアノ跡からお座敷が
掛りました 清後生ですから断わつて下さい。斯う言つてるの
を松島兼太郎が聞いて魚磯を飛び出してしまひました夫れか
らグルグル廻つて十二時ころ雨替町の佐野新の家の前へ来て
見ました寂としてをりますから其の夜の家へ歸りましたが翌
日紺屋町の日吉湯といふへ能く 這入り参りましたスルト
此湯へ藝妓の箱を送ります箱丁の長どん金どんといふのが
這入つてをりました 長お早やう何うだへ金的昨夜の遅かッ
たあア 金遅いの遅くねへのツて外ぢやアねへ然れどもねエ
實又弱ツた 長ナセ 金ナセだつて佐野新の小万さんが昨夜
のベロくま酔て姉さんの處へ歸つて来たんだスルト姉さん
がアソナ氣性あもんだからナセ此んか又酔て来たど叱言を言
ツたんだ然うするてへど妾しが酔たつて宜いぢやアねへか此

伊 井 保 範

家の兄さんの魚磯から鉄半さんの奥座敷を借りて大層お樂し
みだつた妻しだつて些たア道樂もします斯う言ふんです
ルてへどお春さんだから聞かねへんだ兄さんの別あ稼ごの
る人だから詮方があいやア斯ういふてへど其の別あ稼ごだ
て餘まり宜い稼ごやアありませうト斯う言ふんです餘まり
宜い稼ごでねへと言つて見ると矢張り牌圓か賭博マア勝負ど
どの方の免れねへものだらふと斯う思ふんです長さん
うさ何うせアノ人だつて洗ひ上げりやア奥へ飯も食つた人ら
しいよ夫れから何うした 金夫れからねエお清さんが歸つて
來ると直さま親方も歸つて來たといふ譯ハ 長親方が歸つて
來て何うしたへ 金親方が歸つて來てから大亂痴氣泣やら騒
ぐやら引掻くやら金の指輪へもの捲ぎ出してお清さんが敵
さつけるてへど姉さんが其の指輪を噛み碎くてへ騒ぎあんだ

伊 井 保 範

何でもダイヤモンドばかり一ツ百圓からてへのを二ツ指輪へ
籍めてあるんだ大層い騒ぎサ夫れで其のダイヤモンドア小万
さんが拾つて自分の箱の中へ入れちまふ姉さんト親方又食つ
てかゝるお清さんの姉さん又組打ちをする其の中又親方の前
齒が折れてあア其奴が咽喉へ支はて死ぬ苦しみさ夫れで喧嘩
が漸く治まつてマア今朝ア無事でお飯まア食るてへ話しあ
んだ 長然うをか些ども知らさかつた併し齒が缺けてしまふ
てへ騒ぎぢやア大變だ今度ねへ七軒町三丁目又櫻湯てへ湯が
ある其の湯の隣りへ齒醫者が出來たんだ此の人ア困る者にや
ア施こしてやるてへので西洋の器械で療治をして呉れるんだ
から何でも早く出來るんだ名前を何とか言つたツけエ何と
か言つたよオ、然うく 野村吉治といふ先生だから佐野新の
親方んの所へ行つたら救へてあびるが宜い。斯う話しを致して

伊 井 保 範

二人の湯からあがって行きました探偵家の松島の聞かされて
松今の箱丁の話して聞いて見ても佐野新の尋常の奴でな
い彼奴の横濱の才取あがりだと言ったが然うでなあるま
の噂さ興津の宮田の家で四百五十圓の指輪を持ッて行ッた
賊があるといふ噂を聞いたが其の指輪のダイヤモンドが
二つ這入ッておたといふ話し若や佐野新が本体の賊ぢやア
いかしら然う疑ぐッて来ると彼奴の何うしても強盗としか
ぐられぬい彼れを強盗とする時よ無論伊井保範だ然れども
伊井保範の彼んあ奴でなさいと思ふ何しろ彼奴の迂散くさい
奴だ尙ほ罪跡を洗ッてやらんければあらんト風呂からあがッ
て是れから探偵をかゝります此方然やうさことの少しも
存じません佐野新次郎が箱丁の話しよ野村といふ齒醫師の上
手と聞き三月の三十日の日でございましてがブラリと小袖一

伊 井 保 範

枚を着下へッランネルの下着を着込んで縮緬のヘコ帯と書生
羽織銀側の時計をさげて邊附の下駄で七軒町三丁目の野村の
家へ這入ッて参りました野村の書生の案内をして貳階へ通し
先づ茶が一ばい出まして話しをしてゐるところへ這入ッて来
ましたの當野村家の主人野村吉治でございませす静岡の元來
暖氣寺所ゆえ洋襦袢又一つ綿入黒の羽織を着しヘコ帯をしめ
たまゝ年齢二十五六は成らふかといふ人でございませす軽く口
誼をいたしまして野エー貴君の何處がが悪いのでございま
すか 新イヤお話し申すてへと面目がございません昨夜家内
も少し悶着があッて機みで前歯二本缺れましたのでイヤ何
も致やうがさい次第で何うか宜しく診察を願ひます 野夫
れい く 飛んだことでございませす併し其のお齒の何うあさい
ました 新イヤ其の齒を飲み込んでしまひました 野イヤ夫

れ、尙更のことで、直ぐ治療所へお出で下さいまし。治療室へ
 這入ッて参ると幾つともあく薬の瓶が一方よりあつた。安
 樂椅子やうきものがございませう。夫れへ佐野新次郎の腰を掛け
 まして、グイと仰向ました。身が宙へ釣られるやうな
 相成ります。野村の新次郎が口を斯う開けて前歯を見ます。野
 エー、此りやア昨夜、飲けたんぢやアございませぬ。飲いたの、餘
 ほ、以前で貴君の、歯を、あすつて入らしつたので、其の、歯が
 折れたんだ。新、然うでございませう。四年ほど以前、歯を、飲いた
 んで、ございませう。野、ア、然うでございませう。か、矢張り、瀬戸でお
 繼、あつたんです。ナ、新、今度、ア、金で、願ひたいもんで、ござい
 すが、如何ですか。野、宜うございませう。夫れで、金、又、致しませう
 少、をし、此の、肉が、喉、衝いたして、をりますから、今日の、薬を、差して
 置、きませう。明日、午前、七時、ころまで、お出で、下さいまし。此方の方

が、緩んで、痛み、さうで、ございませう。残らずの、歯の、神経を、殺し
 ます。それから、成る、たけ、明日、お早く、願ひたい。吾、儂も、明日、の、一寸、と、用
 事が、ございまして、此の、久能、山下の、木、隠村、といふ、所が、ございま
 す。其、處まで、出張、いたして、彼、處から、艸、薙山へ、登ります。積りで、親
 友と、約束を、致しました。から、何う、か、其の、思召し、でお出を、願ひ
 ます。新、委細、承知、いたしました。何か、食へまして、宜う、ございま
 す。か、野、エー、結構、で、ございませう。劇、薬が、這入ッて、ぬますから、若
 し、吾、儂が、一歩、先さへ、出ましたら、木、隠村まで、お出でを、願ひたい
 十二、時までの、其、處を、ります。から、新、有り、が、たう、存じます。夫
 れで、然う、致しませう。エー、何、ほど、金子を……野、イヤ、夫れ、の
 出来、いたしまして、から、で、宜しう、ございませう。新、エー、何、の、くら
 め、繼、齒の、要り、ませう。ですか。野、然、やうで、ございませう。二十、圓は
 思、召し、下、さい。ア、出、た、ところ、が、四、五、圓で、ございませう。

新何分宜しく願ひます斯う言つて佐野新次郎の今までの打たれて少しく痛みを覺えましたが今の夢のどく忘れまして我家へ立ち歸りました入れ違つて這入つて参りましたのが松島兼太郎さんでございませぬ是れも口誼をいたして松先生、少しお聞き申したいことがございませぬ。斯く申しましたるゆゑ野村吉治が野何御用でございませぬ。尋ねました此の時探偵松島兼太郎が何を尋ねますか次席といたします。

第十五回

偕て松島兼太郎が野村吉治と對ひまして松先生と一寸とお尋ねいたしますが只今参りましたる佐野新次郎と申します者の貴君様存知でございませぬか野イヤ始めて参つたもんでございまして存じてのりませぬけれど拵々吾儕の料理屋や風呂屋へ参つた時又アノ男に會ひます。彼れの藝妓屋の主人で

伊井保範

佐野新といふこと聞いてをります其外のこと別々存じません松エー然れば先生何がひますがアノ男の前歯を缺いたといふことでございませぬが彼れの昨晩前歯を缺いたんでございませぬか其の前前歯を缺いたんでございませぬか松夫れの前夜缺いたんでいふ歯を繼であつたのを昨夜缺いたんでお見込ありませぬか野是れ四年以前に缺いたと本人も申しましたましたか松其のことでございませぬ四年以前に然もアノ四月の二十七日のこととございませぬがアノ日金山の絶頂で愛知の探偵で玉野利吉といふ者が伊井保範といふ強盗のため無念の最期を遂げましてございませぬが或ひに其の時前歯を貳本缺いたのが其の保範でございませぬ伊井保範の彼の佐野屋新次郎でいふいかと斯う思ふのでございませぬが其の件につきまして彼

伊 井 保 範

奴が前日魚蔵で自分不相應赤指輪を携さへてをりました前日
 森はれたところの興津又客人があるといふことでございませ
 が事よッたららばといふ考がへがございませので一寸と貴君
 にお聞きまうすんでございませ 野ア是れハ貴君ハ警察の探
 偵君でございませるか僕も是れから警察へ出やうと存じてをッ
 たのでございませ 松ハ、ア何で然やうでございませるか 野只
 今申し述べましたることく何うあつても警察のお手を借りあ
 ければあるまいと存じます 松夫れハ何ういふ次第でござい
 ます 野何をお隠し申しませう實ハ僕もおさまして今こそ
 齒科醫で斯うやつてをりますすければ最前ハ軍醫でございませ
 此の齒科醫もあつたる願末を松島君マア椅子よかゝつてお聞
 き下さいまし 松ハ、ア貴君が齒科醫もあつたる願末といふ
 のハ 野マ斯ういふ理由でございませす他のことでのございませ

伊 井 保 範

せん只今貴君のお話もありましたる伊井保範、名古屋日の出樓
 の主人万助の家へ客よ來つてをり己れの罪を免れんためと料
 理人の喜助といふ者を殺し己れの金圓および物品を日の出樓
 から盗み出だし表面ハ飽くまで紳士と見せかけ容易あらざる
 ところの悪事をいたし且つ蒲焼町の或るところの女を伴つ
 て逃げたといふところから僕の兄よわたる只今貴君がお話し
 ました通りました利吉が是れを追跡し日金山の事件がございませ
 た逮捕もあらず重傷を負ひ三島の警察醫梅田君の所よをる際
 僕ハ跡より駆けつけて見ますれば生命が旦夕よ追つてをりま
 する然れど只だ其の際よ吾儕が探偵あらずして軍醫止あるこ
 とを嘆じて何うか致して前齒の二本あき奴ハ全たく僕を殺し
 た罪人だと斯く申しまするところから吾儕もおさまして何
 うがあして兄の體を報いたいと存じ夫れから増山といふお方

伊 井 保 範

二百八
とお頼み申して伊井保範の捜索をお頼み申しましたが透り効
を奏さず是非及ばんと名古屋へ歸りましたが夫れより僕
或る外人に依頼をいたしまして又た齒科醫の業を修業をいた
し伊井保範の故郷の駿州と聞き當地へ参らば何日か彼れに出
會ふこともあらふかと夫ればかりを樂しみ又實の今日まで必
長く待つてをりました然るも今日参つた彼の佐野新次郎とい
ふ者の是れを伊井保範でないかと思ひましたから筋肉の然
は痛んでをりませんけれども劇薬を塗つてやりましたゆゑ
明日もあると餘ほ痛くつて堪らんゆゑ必らず朝の参るで
ござりませうが彼奴も常の拳銃を携へてをるといふ噂さ
僕も手を濡らさずして彼れを押へてやらふと存じ久能山下の
木隠村本間といふ家へ彼れを誘引だして實地を糺さうと斯う
考へてをりましたところでもござりましたが貴君まで此のこ

伊 井 保 範

とを申し上げて置きます。松島の吃驚りいたしましたして 松夫れ
ぢやア貴君のアノ玉野君の弟でござりましたか 野然う
でござります。松其りやア驚ろさました何うもマア夢も知
らんことでござります。夫れぢやア彼奴の伊井保範又違ひのこ
ざいません何うも實に憎むべき甚はだしき奴でござります。宜
しうございません何とぞ致しませうから是れから警察へ御同行
下さいませんか 野元より僕も望むところでもござりますから
松夫れでの御同道致しまするでございませう。斯う申して兩
名いたして静岡警察署へ出で事の趣ふさを豫かじめ訴たへ出
でますると警部もおかれましても野村吉治の志ざしを稱賛い
たしました。本來此の野村吉治の玉野吉治と申したのでござい
ます。が玉野と言つての彼の曲者が若しや逃げでも致しまして
の成らんとソコ野村と致しましたのでございませぬ此れより

伊 井 保 範

致しまして其の翌朝早く自分洋服を着いたして僅か一
里しかござりませぬ久能山下の木隠村の本間平助といふ者が
知己でございませぬから此の本間平助の家へ今又斯やうな者
が来るであらうと斯う申して自分草薙山へ登り是れより久
能山へ登つて東照宮を拜し奉まつり我が兄の誓たる伊井保範
を何卒もつて捕縛いたしたき趣ふきを精神をめでたし祈誓を掛け
四邊を見れば今日空晴れわたりて富嶽の峯有りくど雲
を横たへて現れ前を望めば渺々たる荒海東の相模西の三河
伊豆駿河遠江の三國見おろします久能の山頂何となく宜い
心持ちが致しまして久能山の春も夏も秋も登りて見れば最
樂しみの盡きずといふ此れより半ば降りて艸薙の山の邊より來
りませると

草薙山の朝ぼらけ花も靡るゝ霞みけりイザ見んものと

伊 井 保 範

疾く行けば我れより先の人や誰れ
斯く諒ふて参りまする後ろから又一人
進子も散るや六ツの花君と連れ挽き二丁町駕籠の衾にし
めやかに情けもこもる三ツ布團
ト諸ひあがら登つて参る者がございませぬ顔を見ると
松島探偵今一人の巡査大島光利といふ人でございませぬ此の兩
名が野村も對ひまして 函ア一貴君の大層早く御出張もあつ
たと言ひますから木隠村へ實に参つて本間君の家を訪ひまし
たところ貴君の東照宮を参拜も行つたといふから夫れで是
れまで僕等が参つて少し秘密もお話しをしやうと思つて参つ
たんです野是れは何うも却つて恐れ入ります併し涉兩君只
今の歌の恐れ入つたもんでございませぬ是れを聞いて松島探偵
が松イヤお賞めも預かつて汗顔の至りで傍座います大島巡

伊 井 保 範

查が 大「イヤ職掌から放歌高吟あんぞの致すべからざるので
ありませうが今日の何處までも巡査と見せまいと斯やう次第
イヤ何ども申さうやうも傍座いません 野「シテ吾儕も秘密の
お話しといふの何ういふこつて傍座いませうかヤ他のことで
のさいので只今貴君のお宅へ参つてをると非常又齒を痛めて
伊井保範と見込みを付けたる佐野新次郎が見えましたお弟子
が綿を拭いて何かで口を洗つてやりましたやうであります然
うするど痛みのスツカリ去てしまつたと斯う申してをると又
た痛んで来た容子で只今人力車で本間君の所まで乗つ立つて
来ました貴君即刻お出でますつて治療をしあがら彼れが舉動
を探つて兇器でも携さへてをつたら其の場でお取り押へを願
ひたいので僕等兩名も充分手をお貸し申すから併し油断の出
来ませせんが先づ兇器の必らず携帶いたしてをりませうから

伊 井 保 範

野「イヤ御尤もでございます僕も若もの時と存じまして四
連發の懐中又飲んでをりますすが 巡「アー夫れの中へ注
あこつて 野「然らば三名まで本間方まで参るでございませう
巡「エー然やうあら 探「野村君か先きへ 野「御兩名御免を蒙
ふります。爰もおいで三名卿 蘆山を下つて木隠村へ参りまして
本間の様又腰を打ち掛けまする松島大島の兩名の本間の庭の
方へ廻つてしまひました一人野村吉治靴を脱ぎ其の所へ外套
を取つて座敷又登りますと本間の妻女の夫れへ出て参りまし
て 妻「只今静岡岡からお客さんが追掛けてお出でいございませ
昨日の齒が痛むと斯う申されまして 野「アー然うでございま
すか大きな傍苦勞さま。斯う口誼をしたあり起つて奥へ這入ッ
て参りますると十疊の間へ毛布を敷いて坐つてをりまするの
が誰れであるかど見ると佐野屋新次郎でございませう 佐「何う

も先生甚く昨晩の惱みましてございますマア弟子のお手術
で漸やく少しの宜うございます。先生が此方へ来いと仰しや
いましてたゆま夫れで参りました。野「ハア然うでございませう
エーナヨツと口をお見せさいまし。口を開いた齒を見て突然
り背後へ廻つて咽喉を締めつけた野村吉治 野「大盗賊伊井保
範モハヤ免れざるどころだ。斯う言ふと其の手を押へて捻ぢ上
げて佐野屋新次郎 佐「何をあさいます先生吾儕を伊井保範を
んてへ身又取つて覺えのあいのでございます此りやア持ての
外のことを仰しやいます何をあすつて……トいふ途端バラ
と來た松島兼太郎大島光利の兩人 兩「伊井保範其處動く
あ 佐「是れはしたり私しを伊井保範さんて何を間違へて仰し
やいますか身又とつて覺えをさいません此の時野村吉治が前
面又起ち上つて 野「其方ア精神落ちつけて能く良心に問ふて

見ろ明治十四年四月の二十七日日金時の頂上において次家の
短刀をもつて探偵玉野利吉を突き尙ほ拳銃で玉野又重傷を負
わしたらふ其のほか強盜放火の數の限りあいと言われしこと
を我れも承知してをるぞ尋常な名乗れ 佐「是れは以ての外
ことでございまして何で私しが明治の十四年日金時あんど
へ登るもんでございますか 野「其方の二枚前齒の缺けてある
の何より証據だ 佐「是れは富士川の船で私しに缺きました
んだ。此の時松島探偵が 松「イヤ其方ア幾ら陳じたつて無益だ
ぞ魚磯で此の間だ與た指輪の何處から盗んだ其方ん所の小万
ん今朝警察へ引上げて取り調べてあるからモウ今ごろの残り
す陳述した時分だぞ又た我れが女房もあつてゐるアノお春彼
れも不審があるよつて共々引揚たから天網の免れねへぞ
佐「是れは飛んだことを貴君仰しやいます何で私しが然やう

伊 井 保 範

あこどもを又た小万がダイヤモンドを持ッてをりましたッて不
審あこども有りやア致しません私しの女房だッて中く悪さ
をいたしたもんぢやアございません此の時本間の奥で書籍を
讀んでをりました書生がバラくど駈け來ッて佐野屋新次郎
を見るてへど書ア一諸君暫らくお待ち下さい探偵家の方々
齒醫師の先生斯う言ッて座敷へ這入ッて參りましたから大島
巡查松島探偵の振りかへりさま 爾其方の何だ 書僕に此の
家をとるもんでございません實に當家へ三日ばかり以前よ
り自由黨員で演説をして歩行くものだど斯う言ッて奥の一室
を借りて泊ッてゐるんですが實に自由黨員でも何でもござい
ません何をお隠しませう僕に東京府麻布區谷町七十五番地
よをりまする田中重吉とやす者の方よ同居いたす芦原正助と
いふもんでございます此處よをりまする伊井保範の矢張り東

伊 井 保 範

京牛込矢來町よ飯宅をこしらへた時分よ一寸と厄介よあッた
ことがありませす僕に其の時分から窃盜犯を働らさせまして二度
ほど懲役よありませした夫れから伊井保範の手で明治十三年よ
愛知縣名古屋よ赴ふさせました而して同地の秋翠樓よ止宿して
をる際日の出樓といふ貸座敷へ僕ア參りましたッコデ銀側の
時計だの金だのを盗んだことがありませす其の時分よ此の伊井保
範君の言ふよやア其んか。チあ仕事をしさいで大仕事をし
と斯う言ひませして僕に未だ窃盜勉強中ゆゑ到底大仕事の出來
んと斯う言ひませしたところから遂に衝突いたしてございます
から二十圓の金を僕に取ッて東京へ來ちませひませした夫れまで
といふもの四日市と宮の間の汽船で随分悪事ハ澤山働らさ
せました依て其の後殺人犯を犯しましたが何だか知れませんが
夫れまでの強窃盜犯で人殺しといふもの少さいやうでした

伊 井 保 範

尤ども拳銃をもつて諸方の家を脅やかし短刀を振つて旅客を驚ろかしたことの展々あります夫れで薄手を負ひしたぐらゐの有りませすが其の外別々無いやうと思ひれます何しろ伊井保範の違ひございませぬ。斯う饒舌り立てられましたから伊井保範も佐野屋新次郎と何時までも偽のつてをられなくありましたから懐中より拳銃と短刀を出して伊井保範に問掛け爾ア能く有らひござらひの店おろしをしやアがったか此處で斯う割れたら百年目だ天命の歸するところア捕縛するから捕縛しろ日金山の絶頂で探偵玉野利吉を殺したか己れだ爾等も片ツ端から此の世の暇を取らしてやる。ト拳銃を付けて一發野村吉治に向けて打ち放した吉治の顔へ已に當らんぞとあした銃丸の吉治が体を替せしゆえ銃丸の空を切つて飛んで行く背後より松島が「御用」と言つて組んでかゝるを引外し松島探偵を

伊 井 保 範

投げ倒し立ち上つて駆け出さんとするを大島巡査が「己れ」と言つて短刀を持つた腕へカブリ付いた此の途端野村吉治兼て秘め置いたる四連發の拳銃取り出だすが早いかな野兄の響たる奸賊め。ト一發打ち出だしたのの過またず悪漢伊井保範の右りの足を打ち抜いた保範「アッ」と倒れるどころを大島松島の兩巡査の方へ忽ち繩をもつて捕縛し及ぶ伊井保範の荒くれて伊井保範の癖は爾の拳銃を出して打つたか。斯う申しますると野村吉治が野僕に巡査でいあ兄の妄執を晴らしたのだ且つ爾が短刀と拳銃を携さへてをるよつて元より正當防衛されれば爾を傷つけたつて不思議のあるか伊井保範だく殺すから殺せ是れよつけても憎い奴の芦原正助殺えてぬる。芦原の莞爾り笑つて正貴君、今もあつて其かことを言つたつて行かんぢやアあいか僕に輕罪犯だ貴君ア重罪犯だ斯うあつた

伊 井 保 範

ら始めて善心よあれ 伊エ、閻魔の囃へ言ッたッて迎も善人
よやアあれねエ。其のうち大島松島の兩人の野村よ向ひまし
て 兩イヤ野村君いろく御丹精でトウく 此奴を捕縛しま
した併し貴君も兄君の復讐を致したと思し召せば御満足で御
さいませう 野イヤ僕よりの僕の姉が是れを聞きましたら定
めて満足と思ひませう冥府よをる玉野利吉も今浮ぶでござ
いませう是れといふも東照宮の多利益ア宜い心持ちで併し
斯うドシく血が流れて如何なる悪人でも氣の毒ですから
ヤ一つ綱帯をして遣りませう 兩イヤ夫れの野村君御苦勞で
すが綱帯を一ッしてヤッて下さいサア足を出せ伊井保範の一
方の足を出して 伊何うか宜しく願ひます。兼て小やか瓶
所持いたしたる石炭酸か昇汞水を注ぎかけて白布をもッて綱
帯をいたして待たしてございます車夫よ命じて人力車よ乗せ

伊 井 保 範

彼の芦原正助も一の証人として静岡警察署よ拘引を致されま
した此方の小万も女房のお春も其の前よ拘引されお清も共よ
引致れて調べられましてございます小万もお清も放免又相
成ましたが一にお春だけの放免又相成りません其の中又警察
の假法廷よ縮緬の衣類を着て綱子の帯をしてボンヤリ立つて
をるところへ引致れて参つた伊井保範足の血がよじんで色青
ざめて這入つて参りました是れを見てお春が 春オヤ親方お
前何うあつたんでございますか 伊何うも斯うもあるもの
か日金峠の一件が發露て彼奴の舎弟が齒醫師で以てトウく
捕縛されてしまつたがモウ詮方がねへ。斯う言つた時よお春が
春夫れぢやア探偵玉野を妾が銃砲で打つたことも露顯しま
したか。此の時傍いらよめた探偵が 探お春夫れぢやア其方も
玉野を打つたのだナ 春ハイ然うでございます。警部が 警有

伊 井 保 範

二百二十三
り体よ申せく夫れだから其方を歸さんのだ其方の名前を春
といふのでなく全たく町といふのだらふ何うだ 春ハイ最
う斯うありましたら何も角も皆申しまするが妾し佐野町
と申しまするものでございまして妾の妹の小万の實名お銀
と申します此の間だよモウ一人お節といふ妹がをったんで
さいますが今の行方知れずあつてしまつたさうでございま
す全たく伊井保範さんが明治の十四年の四月二十七日探偵さ
ん又捕まつて組解れつ致して危あいつ時よ石よ顔を打付けて
齒を缺いてしまひ是れなと思ひましたから妾し拳銃でもッ
て思はず打ちましてございませす 警ウ々然うか宜い……其の
件よついでに又た改ためて取り調べる今日拘留いたす伊井
保範是れへ伊井保範假法廷へ立ちまして警部が宿所姓名をお
糺しよ相成りませす此奴宿所も姓名も判然したことを申しま

伊 井 保 範

せん生れ富士郡の或る村で親も分らず兄弟も分らず我が名
を伊井寛三郎と申して十九の時から悪事をいたしまして今年
四十年まで二十一年強盗をいたしたけれど健忘性で皆ん
あ忘れたと言つて此の日金山事件だけを陳述よおよび其
の他の事ハ饒舌りませんでございまして其のうら又時間來り
ましたゆゑお町も保範も監獄へ送りよ相成り豫審へ廻りまし
てござりまするが此方のお話し替つて日の出樓の万助の静岡の
二丁町よ新日の出樓といふ貸座敷を出してをりましたが新日
の出樓ハナト面白くあから何か縁喜の宜い名よ替へたいと
いふのでソコ萬歳樓と致しまして是れハ三河國から出て徳
川様ハ八百万石にあつたといふ其の祝ひよ萬歳といふものを
お用ひよあつたといふので万歳樓と名づけて大層繁昌をいた
してをりまするスルト万助ハ大勢の娼妓を呼んで小冬といふ

二百二十四

妾を傍ッばへ置きまして 五、今日の五月の節句だから皆あま御馳走をしてやるから好きあものを請求るが宜い何でも買つてやるから。斯う申しますと 甲、アソ旦那さん外ぢやアありませんんけれど何よも妾しア食べたくあいんですが薩摩芋を五銭がどこ買つて頂きたいもんです 五、お冬金山のお芋を五百だどよ其の跡の 乙、妾しん金鑛を十銭食べたうございます 五、豊浦が金鑛を拾錢 丙、妾しん鑛のお刺身を二人前は食べたうございます 萬、玉藻が鑛の刺身だどよ 五、オイ小稲おまへに何だへ。仇ッばい女が 小、妾しんお脂を三拾錢食べたうございます 五、此奴ア面白。お脂といふてへと跡の娼妓が 一回、小いあさんを真似て皆あお脂です夫れよお酒を五升 五、此奴ア宜い酒と脂でドン、騒ぐが宜い夫れよ又た己惚氣があるあら皆あ聞かせるが宜いせ 甲、オイと玉藻さんお

前さんお己惚氣あさいナ金山さんおのろけよ。金山が皆あを見て 金、お芋が五錢だからおのろけも何もあるもんか。所へ若い衆が 若、オイと小稲さん毎も入つしやいます代官の橋本さんがお出でよありました 小、何だね。お客のことを代官さんて只今行くんですよ旦那さん御免下さい。小稲といふ女はトントノと階子を登ッて突然り部屋へ参ります橋本の友染縮緬の布團の上へ洋服のま、ドツカと坐してをります 小、オヤ橋本さん能くお出でね大層今日早いノ 橋、ウム裁判所から直ぐ廻つて来たから夫れで早いよ 小、アア裁判所つてお金の貸借ですか 橋、イヤ刑事の辯護を依頼されたんだ 小、刑事の辯護へあ何ですへ 橋、其方も新聞で見たらふ此の兩替町よ佐野屋新次郎てへものがあるだらふ 小、ハア 橋、其の佐野屋新次郎てへもの強盗殺人放火罪の悪人で伊井保範とい

二百二十六

ふ奴あんだ此奴が富士郡の洲本村といふところから出た奴あんだが何うしても夫れを言ひんのだ矢張り兩替町で處分を受けて伊井保範と名乗つて其の原籍を洗へば牛込矢來町だとか何とか言つて其の辯護人よりも眞實のことを言ひんのだ。然う聞くど小稻が俯向いてメツク泣いてをります。橋其方のナセ泣くんだ。小、然うして伊井保範へ人のお女房さんのお町さんへ人何うおりました。橋、憐れひびきりアノ女房のお町だ明治の十四年四月二十七日日金山でもつて探偵を殺す氣もあくマア言ひ、亭主の伊井保範の危ふいところを一發拳銃を打つて重傷を負ひしたんだ。檢事飽くまで故殺をもつて論じたから僕に充分辯論をしてヤツたが併し其の効があつた。是を見て今日の情狀を酌量して有期徒刑十五年と處せられた。是れを聞いて小稻「ソツ」と打ち倒れてしまひました。橋、何でお前

二百二十七

其様あゝ慨くんだ。小、何を隠しませう夫れは妻しの姉さんあんです。橋、フアン夫れぢやア和女ア横濱の野村半兵衛の金を持つて逃げた。妻のお節さんぢやアあいか。小、ハイ然うです。橋、何うして此處へ來たんです。小、實に情夫の笹原宗三郎さんへ人ど三百圓金を持つて大坂へ行つたんです。大坂へ隠れてゐるうちサツとしてぬれ、宜つたんです。が米相場へ手を出して六百圓から損をしてしまつて妾しの身体を或る人の抵當と取られ大坂で娼妓とあつたんです。が此の静岡から買ひに來て此處へ姉さんと兄さんがゐるから何うか身脱けも出來ると思つて來て見ると兄さんの三月の三十一日と捕まツちまつたといふ話し姉さんも矢張り何の罪だか捕まつたといふ據どころあゝ此の勤め妹のお銀のどこへ人をやりましたらお銀の或る辯護士のところへ行つてゐるてへ事を聞きました。が今

伊 井 保 範

までの貴君も能く伺がひませんでしたが多存知ですか
橋夫れの知つてるとも僕の家もお銀のゐるんだ 小然うで
すかッシテ兄さんの何ういふ處分も成りました 橋お前の兄
の大變な悪事があつて先づ第一刑法第三百七十條強盜の罪と
二百七十二條の謀殺の罪と四十二條の放火の罪と是れを合せ
て首が二ツあつても足りんだがマア今度静岡縣で死刑も行
かされることよあつたからお前の佛事供養でもしてやるが宜
い……然うして情夫の笹原宗三郎へ男の何うした 小夫れ
の未だ大坂ををるんですが今ごろの何うしましたか便つて此
處へ來ますかしら。斯う話をしてゐるところへ 若魁妓お鮎
とお酒をト持ち込んで参りましたトマン万助も其處へ來りお
才の相果てたことや種々の物語りをいたしまして遂に其のま
ま其夜の過してしまひましたが新曆五月の十六日といふよ悪

伊 井 保 範

漢伊井保範の遂に絞罪の刑に處せられたました假の妻お町は置
きましての有期徒刑とて一命だけを取り止めお節の野村半兵
衛を誑ら加した各よて苦界の勤めを出づることの出來ません
身と相成りました辯護士橋本のお銀といふ妹の世話をいたし
て是れの清水港へ再び藝妓も出だすといふことと宗三郎の失
敗も失敗を重ねて乞食同様もあつて末にお節の小稲も愛想
をつかされ喰ふや喰はずで興津の波打際も握飯を貰つて食事
をしてをりまするところ或人が酒を一ぱい飲めと申しました
ゆゑ其の酒を一ぱい飲んで秋のことでございましてゆゑ心持
よく久しふりて腹へ酒が這入り飯が這入つたので岩へ掴まッ
て寝てしまひましたところトツと打ちあげる波の爲めよ身体
の渺々たる海へ持ち行かれまして己れも少しの泳ぎますから
手足を悶掻きましたたが其の甲斐もあく遂に魚族の餌食と相成

伊 井 保 範

ッてしまひましたお才と言ひ宗三郎と言ひ實は哀れお最期を
送げてしまひましたが大島巡査松島刑事の夫れく御褒美も
與かり齒科醫野村こと玉野吉治の愛知縣へ歸つて兄の年回を
あし姉を慰さめ静岡縣よりも伊賞與も與かり愛知縣よりも伊
褒美を賜はり最早や齒科醫をあすの必用あしとて再び軍醫
と相成り明治二十七八年の役も第三師團へ從がって滿州の野
を跋渉し歸國の後ちの勳章を賜はり再び自から好んで醫師
の少さいといふので此の野村吉治君の臺灣の臺北へ趣ふかれ
たといふことでございませすが實は天晴れお伊方お辻どのに能
く操を守つて世の中を憂しとあして遂は名古屋の市街を離れ
美濃の養老の近邊へ居を移したといふことでございませす心と
もよ清らかお話し只だ万歳樓の小稻の其の後ち四五年間
苦界におりましたが心を改ためたと相見え夫も生涯苦界を

伊 井 保 範

出すまじといふお憎しみも春の雪と消え濱松の或る商人が身
請をして本妻もあはしたといふ万歳樓も是れがために若干の
利益を得て遂は静岡の妓樓も娼妓を苦しめる元だとは是れを他
人へ譲り名古屋の日の出樓も跡式を譲り自分の金を貸して浮
世を安く送ること考へ先づ宗三郎の母親が老て未だよを
りまするところから此の者の我家へ招いで老を養おはせ以前
名古屋よぬた娼妓の常盤木も櫻木も夫れく身の振方が付き
ましたゆゑ舊主人かたへ立派な衣服をして一年又一二度づ
遊びも参るといふ身の上にありました万助も何不自由なく世
の中を送り能く慈善を施しをるといふ話し名の体を現はす
どの宜いことか来ることとありましたが實は万歳樓と相成つ
て宜いことが来ることとありましたが大尾といたします
います先づ此のお物語りも是れにて大尾といたします

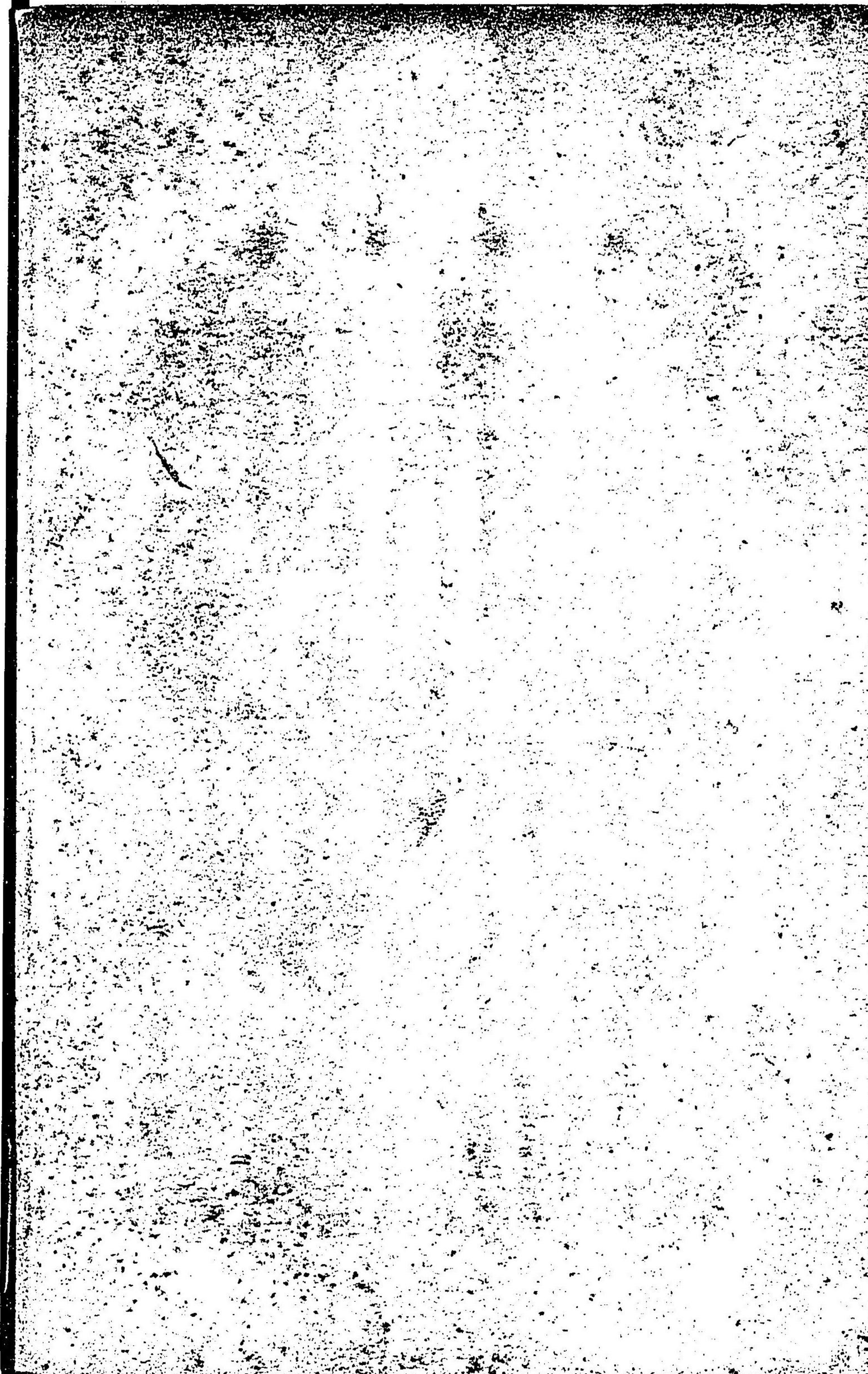
伊 井 保 範

探偵
實話
伊
井
保
範
終

明治三十年六月一日印刷
同年同月十五日發行



講 演 者	發 行 者	發 行 所	印 刷 者	印 刷 所
東京市京橋區日吉町二番地 柘植正一郎	東京市京橋區南橫町十三番地 中島石松	東京市京橋區南橫町十三番地 松聲堂	東京市日本橋區新和泉町一番地 瀧川民治郎	全所 今古堂活版所





096437-000-1

特9-833

伊井保範 (探偵実話)

松林 伯知 / 講演

M30

DBS-0146

